

圃場整備を契機とした松江たまねぎの産地づくり

1. 取組の背景

(1) 松江市でのほ場整備を契機とした水田園芸の推進

新庄、大野、西長江地区において大区画ほ場整備を契機に、担い手確保のための集落営農組織の法人化と高収益作物として水田園芸品目(キャベツ・ミニトマト・たまねぎ)の導入を推進。(R7年1月時点、設立予定を含む)



(2) 新庄地区で水田園芸品目を導入

先行する新庄地区では、R2年に「(農)にこここファーム新庄」を設立し、整備完了後のほ場約45haで、水稻栽培に加えて、水田園芸品目(たまねぎ)を導入。

2. 取組の経過及び概要

(1) (農)にこここファーム新庄でモデルとなる取組を開始

① 高収益作物として“たまねぎ”を選定

作業が機械化され、水稻との労力分散可能。

② 「たまねぎチーム」(R2.4月)による生産体制づくりと関係機関の支援

栽培経験のある営農部長が牽引し、女性・高齢者も管理作業に参加する生産体制をつくり、関係機関も松江市、JA、県の担当が連携してサポート体制を構築。

③ 機械化体系を整備

目標面積5haに対応する中規模機械化体系を整備。

④ R6年産から栽培上の課題解決に向けた取組

連作障害対策としてブロックローテーションの徹底。

土壌排水が悪く生育不良となるため、サブソイラーの施行。

労働時間縮減に向けた人員配置の適正化の検討。

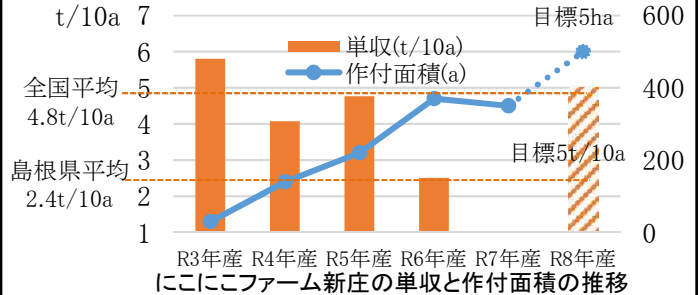
(2) 他地区へ波及と「松江たまねぎ産地ビジョン」づくり

新庄に続く、大野・西長江のほ場整備地区での取り組みに波及させ、松江地区全体でのたまねぎの産地づくりビジョンを明確にし、産地としての仕組みづくりや生産部会の設立に繋げることが必要。

3. 取組の成果

(1) 目標5haに向けた作付面積の拡大

機械化体系整備により効率の良い生産が可能となり、順調に面積を拡大してきたが、R6年産は連作障害(べと病発生等)により減収したため、R7年産は作付面積を現状維持。



(2) 松江地区の「収益モデル」と「産地ビジョン」の提案

新庄の実証をもとに、5haの中規模機械化体系における「たまねぎの収益モデル」と松江地区全体の「松江たまねぎ産地ビジョン」を提案し、関係機関で合意形成。

【モデルの根拠】

単価: JALまね青果市場向けたまねぎ
過去5年加重平均/資材費・動力光熱費: 新庄R4~5年実績/減価償却費:
5haモデル機械体系/施設利用・販売経費: JALまね広域玉葱調製保管施設
利用料/人件費: 目標61.8時間

たまねぎ収益モデル(R5年産)

科目		円/10a
収入	売上	575,000
	収量(kg)	5,000
	単価(円/kg)	115
	産地交付金	50,000
	合計	625,000
支出	資材費	122,332
	減価償却費	33,425
	動力光熱費	10,000
	施設利用	100,000
	販売経費	224,375
	人件費(1000円/時)	61,800
合計		551,932
所得		73,068

代表者から一言



にこここファーム新庄
津森代表理事組合長

初めてのたまねぎ大規模栽培で苦
労が多く、県の専門家による指導
がもっとほしい。引き続き5haま
での拡大に向けて取り組んでいきま
す。

4. 課題と今後の取組方向

- (1) 排水、雑草、石礫、連作障害等の対策を徹底し、目標単収5tを確保。
- (2) 人員配置の見直しや機械を集落内外で最大限活用する等によるコスト削減と販売単価を確保することで、収益性を向上。
- (3) 「松江たまねぎ産地ビジョン」の実現に向け、機械の共同利用等の具体的な取組を明確にし、実践に移行。